

研究ノート

## 「駐在保健婦」の公衆衛生看護活動の特徴 —地域のセルフケア支援の観点から寄生虫予防活動に焦点をあてて—

吉川千恵子<sup>1</sup> 野口美和子<sup>2</sup> 大湾明美<sup>2</sup>

キーワード：地域看護 駐在保健婦 公衆衛生看護活動 セルフケア 評価

### I はじめに

戦後日本における保健婦駐在制度は、1948年に高知県で開始された。我が国の保健婦駐在制度の第一人者である上村は、「この駐在制の基本となる考えは、新憲法における主権在民の思想であり、公衆衛生看護業務の普遍性から出発したものである」と述べている（上村, 1971）。

沖縄県の駐在保健婦制度は、1950年にGHQから看護顧問として赴任したワニタ・ワーターワース女史および米軍公衆衛生部に赴任したジョセフィン、Hケーザー女史の指導の下で、1951年に公衆衛生看護基準が設定された。その中で、県保健所保健婦の市町村駐在は施行された。公衆衛生看護活動の目的は、担当地区住民の健康増進と疾病予防および健康管理である（公衆衛生看護婦会編, 1967；沖縄県環境保健部, 1977；沖縄戦後の公衆衛生の歩み, 1981；沖縄県保健婦長会編, 1994；沖縄県, 1998）。それは本県の離島へき地の多い地理的条件、交通事情、市町村の財政基盤、医療施設を含む医療人のマンパワーの不足、公衆衛生上にみられる諸々の問題等を検討した結果、保健婦の身分を県身分一本化にし、地区担当制による駐在保健婦として全地域住民を対象とした活動をする旨であった。指導者たちは駐

在保健婦の日常の実務指導、公衆衛生看護婦講習会、看護職者の免許に関すること、看護行政などの基礎づくりを献身的に指導された（金城妙子, 2001）。1997年の地域保健法施行に伴い、先駆者たちにより誕生した保健婦駐在制度による多様な活動は終焉した。

これまでの駐在保健婦活動に関する研究は、沖縄の保健婦経験者たちを中心に、担当地区住民の健康生活への支援に関する活動報告が多くある（公衆衛生看護婦会編, 1967；沖縄県環境保健部, 1977；沖縄戦後の公衆衛生の歩み, 1981；；沖縄県保健婦長会編, 1994；沖縄県, 1998）。また、保健婦駐在の制度の史的考察や制度の意義に関する報告（大嶺千枝子, 2001；大嶺千枝子ら, 2002；宮城シゲら, 1883）、駐在保健婦活動が結核と戦った実践報告（与那原節子, 1983）、過去の駐在保健婦活動はプライマリヘルスケアであるとの報告（大湾明美, 2007）などがある。

ところで、看護理論家のD.E.Orem (2001)は、セルフケアを「個人の学習された目標試行的活動であり、自己の生命と健康と安寧に関わる発達と機能に影響を及ぼす要因を調整するために、具体的な生活状況の中で自己または環境に向けられる行動」と定義し、看護の役割をセルフケアへの支援と説明している。公衆衛生看護活動も保健師である看護職者が実践する活動であることからセルフケアへの支援が役割であると考えられる。しかし、これまでの駐在保健婦の

<sup>1</sup> 元沖縄県立看護大学

<sup>2</sup> 沖縄県立看護大学

公衆衛生看護活動は、住民自ら健康生活の実践ができるような支援（住民のセルフケア支援）や、地域の人々が助け合って健康づくりができるような支援（地域のセルフケア支援）の観点から分析していない。筆者は、過去の駐在保健婦の活動を振り返って、住民と保健師が相互に支えあえる活動こそが保健師活動の原点と考え、住民のセルフケアへの支援をとおして、地域のセルフケア支援を高めるよう努めてきた。

そこで、本研究の目的は、卒業直後に保健婦として駐在した担当地区での寄生虫予防活動に焦点をあて、筆者の保健師活動を地域のセルフケア支援の観点から分析し、「駐在保健婦」の公衆衛生看護活動の特徴を明らかにする。

## II 研究方法

### 1. 当時の対象地域の概要と駐在保健婦活動

筆者は、1964年4月、公衆衛生看護学校卒業と同時に八重山保健所平久保駐在所へ、駐在保健婦として赴任した。当時沖縄本島から八重山まで空路はなく、保健所のある石垣市まで船で約20時間を要し、沖合で小舟に乗り換えて石垣港へ上陸するという行程であった。また、保健所から平久保駐在所まではバスで約2時間を要した。そこにある保健婦駐在所（住宅兼用）を拠点に、住民とともに生活をしながら保健婦活動を実施した。主な保健婦活動は、保健所の指導を受けながら結核集団検診および結核患者の在宅治療、寄生虫集団検診および集団駆虫と個別駆虫へ、乳幼児健診、予防接種、健康相談、衛生教育、家庭訪問、救急看護などであった。

### 2. 地域のアセスメントからニーズの抽出

A地区は、琉球政府による計画的移民地域で沖縄本島から移住していた。当時の人口は1,419人、世帯数248、医療施設なし。農業地域で、各家庭に電気・電話はなかったが区長宅に1台の電話があり保健所からの連絡は区長が

伝言を受けて保健婦が電話をかけ直していた。水は共同水道で各字に1～2か所あった。赴任直後、子供たちの下校時の風景が駐在所の玄関から見えた。汚れた衣類、汚れた手と裸足が目にとまった。前任の駐在保健婦から寄生虫保有率26.5%、フィラリア保有率10.0で寄生虫保有率が他の地区より高い地域として引き継がれた。また、地区踏査の案内役の区長と婦人会役員から「貧血、めまい、頭痛、倦怠感などの症状をもっている人が多い」「寄生虫をなんとかしなければ」との情報を入手した。また、素足で尿尿を畑の肥やしとして処理している場面を見た。

そこで、地域の中で解決可能で優先すべき健康課題として「寄生虫予防」をニーズとして抽出した。

### 3. 研究素材の作成

研究素材は、①筆者の講義（2015）「沖縄の駐在保健婦・過去の実践に学ぶ」よりA地区における寄生虫予防活動の逐語録、②第14回沖縄県公衆衛生看護研究発表会（吉川、1966）「A地区における寄生虫予防活動」の集録、③看護大学退職記念誌（吉川、2006）「A地区の駐在保健婦活動」の集録である。

### 4. データの作成方法

①から③の研究素材を読み返し、伝えたかった内容を筆者が加筆し、それをもとに共同研究者2名との討議を繰り返し3回行った。共同研究者Aは、活動の場（地域）を把握しており、駐在保健婦制度の歴史に詳しい者である。共同研究者Bは事例研究や質的研究指導の経験があり、離島・へき地の看護活動の歴史に関心を有している者である。

討議は、素材をもとに、活動の流れに沿って、当時の筆者の体験を感情や住民の反応を思い出すよう共同研究者が質問した。質問内容は、何

故、そのような保健師活動をしたのか？住民はどのように反応したのか？住民の反応に保健師はどう思ったか、どう感じたか？等であった。討議内容は録音して逐後録を作成した。逐語録を読み返し、事実確認を経時的に紐解き、体験を詳細に思い出しながら、「駐在保健婦活動の体験」を作成し、データとした。

データの真実性を確保するために、討議において筆者は、記憶だけでなく当時の報告資料や諸記録を読み回答した。また、共同研究者の質問の回答が思い出せないときは、無理に答えないよう促した。一方、共同研究者は筆者の回答について、研究素材に関わる全体（地域の状況、駐在保健婦の教育や勤務形態、当時の住民の暮らしなど）を考慮しながら討議した。また、筆者の回答のしかた（無理に思い出していないか、筆者のこれまでの行動傾向、思考傾向など）からみて、了解可能かを吟味しながら討議し、納得のできた内容を駐在保健婦活動の体験として認めた。討議はすべて録音され逐語録に起こし成文化した。

## 5. 分析の方法

加筆修正し成文化されたデータ「駐在保健婦活動の体験」から、地域のセルフケア支援の観点は、①地域のニーズにどのように応えているか（駐在保健婦によるセルフケア支援活動の体験）②駐在保健婦活動によって地域のセルフケ

ア能力はどのように高まったか（住民によるセルフケア支援活動の体験）③活動を通して住民と保健婦に何をもたらしたか（住民と駐在保健婦によるセルフケア支援活動の体験）について質的帰納的に分析した。分析のプロセスは、①セルフケア支援活動の体験に該当する内容を原文で抜き出し、②その意味内容が変化しないようキーセンテンスを作成、③キーセンテンスの類似したものを集め、④分析の視点に照らして駐在保健婦活動の特徴として命名した。

分析の際は、必ず筆者と2名の共同研究者の同席で行い、同意が得られるまで繰り返し討議し、妥当性の確保に努めた。

## 6. 公表にあたっての倫理的配慮

駐在保健婦活動で知り得た個人情報、特定できないよう配慮した。また、地域のデータについては、当時の事業報告書や学会発表集録（第1回沖縄県公衆衛生看護研究会集録：昭和40年「A地区における寄生虫予防活動」）などすでに公表した範囲とした。

## III 結果

### 1. 住民によるセルフケア支援活動の体験(表1)

この地域の最も優先すべき健康課題であり、地域のニーズである寄生虫予防に取り組む方法として、住民代表である区長や婦人会長、学校の意見を聞いた。区長は「寄生虫の問題は、い

表1 住民によるセルフケア支援活動の体験

住民によるセルフケア支援活動の体験	駐在保健婦活動の特徴
〈区長と婦人会長は熱意を持って保健計画案を了承した〉	【健康への意欲】
〈区長と婦人会長は保健計画を共有することで主体的関わりを表明した〉	【住民の主体的関わり】
〈区長たちは主体的参加のために地区組織を活用した情報伝達を決定した〉	
〈親や学校は子どもの清潔行動に気づき、清潔行動を拡大させた〉	【行動力の発揮】
〈婦人会は衛生教育を欠席した世帯へチラシをもって訪問し説明した〉	
〈地区組織は必要に応じて歩いて住民を呼び込んでいた〉	
〈婦人会は検便の提出をするよう世帯に呼びかけた〉	
〈婦人会は駆虫者に声かけや雰囲気や和らげる会話など住民ならではの活躍をした〉	【成長】
〈住民は活動・知識が増え、駐在保健婦を代弁できるほどになっていた〉	

つも話題になるが実施するまでに至らなかった。ぜひ、地域全体で取り組めるようにしたい。協力体制を作っていく」と語り、〈区長と婦人会長は熱意を持って保健計画案を了承し（た）〉、【健康への意欲】を伺わせた。そして、〈（区長と婦人会長は保健計画を共有することで）主体的関わりを表明し（た）〉、〈（区長たちは主体的参加のために）地区組織を活用した情報伝達を決定し（た）〉、【住民の主体的関わり】を表明した。

また、保健婦は裸足で登下校する子どもたちの手足の汚れを見て、駐在所前の共同水道を利用して手足洗いを奨励したことをきっかけに、〈親や学校は子どもの清潔行動に気づき、清潔行動を拡大させた〉。その結果、子供も大人も履物を履くようになって行った。

寄生虫予防活動が始まると、区長や婦人会（地区組織）は〈衛生教育を欠席した世帯へチラシをもって訪問し説明した〉り、〈地区組織は必要に応じて歩いて住民を呼び込ん（でいた）〉だり、〈（婦人会は）検便の提出をするよう世帯に呼びかけた〉り、公民館において実施した集

団駆虫には服薬に必要な水をコップに準備したり、服薬後の安静時間には〈婦人会は駆虫者に声かけや雰囲気や和らげる会話など住民ならではの活躍をし（た）〉ていた。このように、住民として寄生虫予防に【行動力の発揮】がみられた。

寄生虫予防活動が終了するころには、〈住民は活動・知識が増え、駐在保健婦を代替できるほどになっていた〉り、住民はセルフケア支援活動を通して【成長】していた。

## 2. 駐在保健婦によるセルフケア支援活動の体験（表2）

駐在保健婦は、訪問時に各家庭に風呂場がないことを知り、駐在所のお風呂場を週末に住民に開放した。子供たちが利用するようになり、〈駐在所の設備を用いて、子ども達に清潔行動を学習させた〉。これを機会にお風呂に入る習慣がつけられ、各家庭に五衛門風呂が広がった。

寄生虫予防活動が始まると検診率を上げるために〈早朝から夜間まで、住民の生活に合わせた衛生教育を実施した〉、そして検診の必要性

表2 駐在保健婦によるセルフケア支援活動の体験

駐在保健婦によるセルフケア支援活動の体験	駐在保健婦活動の特徴
〈駐在所の設備を用いて、子ども達に清潔行動を学習させた〉	【柔軟な対応】
〈早朝から夜間まで、住民の生活に合わせた衛生教育を実施した〉	
〈場所はどこでも（公民館、学校）、呼び止められて、畑で衛生教育をした〉	
〈早朝と夜間を問わず、駐在保健婦のみで健康教育を行った〉	
〈ゲントウ機が使えないので、リーフレットならびにポスターを作成し、臨場感に訴えるために標本を確保した〉	
〈地区のリーダー力の差に合わせて活動をした〉	
〈特異な状況を示したケースに対して帰宅時間を待って直ぐに訪問した〉	
〈地区のニーズと協力体制の実感に基づき地区全体での取り組みを計画した〉	【住民とともにすすめる活動】
〈住民の熱意の賜である保健計画は実施においても住民と相談しながら進めた〉	
〈住民の声を聞きながら、相手に合わせて実施できるように活動母体を組織化した〉	
〈寄生虫予防活動をトイレ改善へ広げるために、役場担当者と同僚調査し補正予算獲得にこぎ着けた〉	【住民活動からの支援】
〈よいことは継続できる住民の力を信頼した〉	
〈婦人会の駆虫を願う優しさが伝わり助けられた〉	
〈困難な駆虫を体験した住民から励まされた〉	
〈目を見張る婦人会の活動により、献身の思いがかき立てられた〉	
〈集団駆虫が適応できない事例の存在にも気づかされた〉	【気づきによる活動の多様化】
〈住民の義務感による予期せぬ行動から、その対応の必要性の理解が広がった〉	

をく場所はどこでも（公民館、学校）、呼び止められて、畑でも衛生教育をした。電気がなくく幻灯機が使えないので、リーフレット並びにポスターを作成し、臨場感に訴えるために標本を確保した。保健婦活動を進めていくうちに地区のリーダーに住民に対する統率力や調整力に差があることがわかりく地区のリーダー力の差に合わせて活動した。集団検便時には特異な状況を示したケースもあり、そのく特異な状況を示したケースに対して帰宅時間を待って直ぐ訪問（した）し、原因を確認するなど時間外を問わず【柔軟な対応】を行った。

また、く住民の熱意の賜である保健計画は実施においても住民と相談しながら進め（た）、住民全体で取り組む必要性から検診チームとしてく（住民の声を聞きながら、）相手に合わせて実施できるように活動母体を組織化した。その結果、活動の過程に混乱はなく計画の各段階（衛生教育・集団検便・集団駆虫・後検便・報告会）において住民の自主的な協力により円滑に実施できた。そして、再・新感染予防の観点からく寄生虫予防活動をトイレ改修へ広げるために、役場担当者と同僚調査し補正予算獲得にこぎつけた、三槽式便所以外の世帯を対象に改修に向けて補助金を獲得した。このようにくよいことは継続できる住民の力を信頼した結果、【住民とともにすすめる活動】として広がって行った。

さらに、各公民館で実施した集団駆虫では不安をもつ保虫者へく婦人会の駆虫を願うやさしさが伝わり助けられた。また、1駆1検法で行った集団駆虫で、3回目の駆虫者の中には、「なんで自分は駆虫できないのか、まじめに服

薬して夕食も欠食しているのに」と疑問を持つ人もいたが答えられなかった。3回目の駆虫で陰性になったとき、「あの時は心配かけてすまなかったね」といわれてく困難な駆虫を体験した住民から励まされ（た）、保健婦を気遣っていたことが伝わり安堵した。

検診班の検便場所は、駐在所を利用したが、宿泊所は民泊で場所の交渉や食事の炊き出しなどく目を見張る婦人会の活動により、献身の思いがかき立てられた。このように住民には寄生虫予防活動の各段階において積極的かつ自主的な【住民活動からの支援】があり、保健婦は心強く活動できた。

しかし、公民館で集団駆虫できなかった人のく集団駆虫が適応できない存在にも気づかされ（た）、訪問による個別駆虫を行ったが、婦人会も同行して副作用の観察などに協力した。そして、家族全員検便を出さないといけないというく住民の義務感による予期せぬ行動から、（その対応の必要性の理解が広がった）く1家4人陽性に疑問をもって訪問し確認した例など【気づきによる活動の多様化】も体験した。

### 3. 住民と駐在保健婦によるセルフケア支援活動の体験（表3）

保健婦が行う衛生教育は、目的をもって実施するが、特に夜間の衛生教育では、寄生虫以外の病気や子育て、栄養、受胎調節など多岐にわたる質問が多く、また住民同士の経験など話題になりく衛生教育の場は、住民と保健婦の多様な相互学習の機会となった。成果報告・事後懇談会は、各公民館で住民を対象に開催したが、全地区5字の中で自分達の住んでいる字の

表3 住民と駐在保健婦によるセルフケア支援活動の体験

住民と駐在保健婦によるセルフケア支援活動の体験	駐在保健婦活動の特徴
（衛生教育の場は住民と保健婦の多様な相互学習の機会となった） （成果報告会は、やればできるという成果を住民同士で確認する場となり、住民と保健婦ともに喜んだ）	【成果の共有と学び】

数値が気になるらしく、関心をもって聞いていた。A地区全体の寄生虫保有率が1年間の活動で26.5%から4.4%に減少した結果に、〈（成果報告会は）やればできるという成果を住民同士で確認する場となり、住民と保健婦ともに喜んだ〉。住民と駐在保健婦によるセルフケア支援活動の体験は、【成果の共有と学び】を得た。

#### IV 考察

##### 1. 住民によるセルフケア支援活動の体験からみた地域のセルフケア力（自治力）

保健師活動は、地区踏査と地域の健康指標、地域のアセスメントを行い、ニーズを抽出することから始まる。住民によるセルフケア支援活動を通して、担当地区の住民に責任をもって支援するために訪問や健康相談など日常業務を重ねながら、抽出されたニーズから優先課題を導き支援方法を工夫する。A地区の寄生虫予防活動では、「寄生虫を何とかしたい」という住民のニーズと、「寄生虫保有率が26.5%で何とかしなくては」という保健婦のニーズが一致して、地域の中で解決可能で優先すべき健康課題とし

て寄生虫予防をセルフケアニーズとして抽出していた。

オレム（1993）は、セルフケアモデルの中で、「セルフケアとは、自分の健康状態を理解するための理性と、適切な行為を選択する意志決定の技術とが要求される能動的な現象である。（中略）。健康と発達を維持するために必要な活動は学習されるものであり、年齢や成熟状態、文化など、多くの要因の影響を受けるものである」と述べている。

A地区の住民は、自らの健康と発達を維持するために寄生虫予防は必要な活動としてニーズを表出していたことを駐在保健婦が支援したことで、必要な活動として学習し、【健康への意欲】を高め、【住民の主体的な関わり】を可能にし、【行動力が発揮】され、住民の【成長】につながっていったと考えられた（図1）。つまり、駐在保健婦によるセルフケア支援活動は、地域のセルフケア力（自治力）をエンパワーメントし、健康課題を解決し成長させる特徴があることが示唆された。

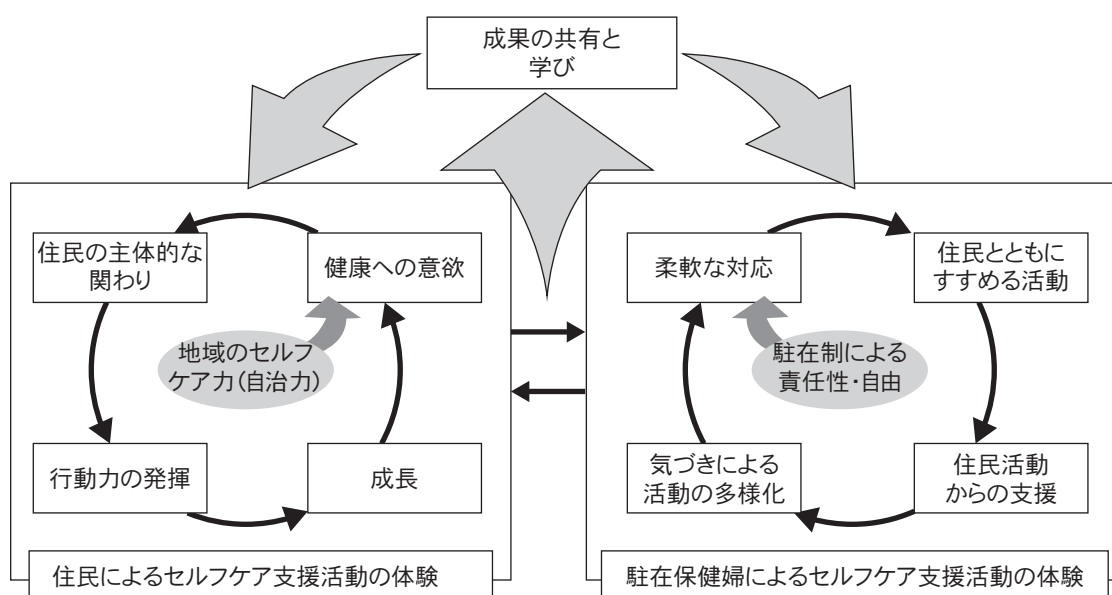


図1 地域のセルフケア支援としての公衆衛生看護活動の特徴

## 2. 駐在保健婦によるセルフケア支援活動の体験からみた駐在制による責任性・自由

保健婦駐在制度を沖縄に導入したケーザー女史は、「住民に対する奉仕の心と、住民の公衆衛生を守るために公衆衛生看護婦になる＝プロフェッショナル」、「そこにあるものを上手に活用する、その地域でとれるもの、その家庭にあるものを利用する能力＝看護技術」、「住民との信頼関係＝日常的な関係づくり」の重要性を常に強調していたと伝えられている（金城妙子, 2001）。

筆者は、ケーザー女史から教育を受け、後に沖縄の公衆衛生看護の母と呼ばれている金城妙子氏から駐在保健婦活動について教育を受けた。そのため、住民に対する奉仕の心で、住民との信頼関係を築く努力をし、その地域にあるものを活かし健康課題に取り組む責任を使命として離島勤務に臨んだ。駐在保健婦として、その責任を果たすために、勤務時間や勤務場所を問わずいつでもどこでも自由に活動した。そのような【柔軟な対応】で、【住民と共にすすめる活動】を通して、【住民活動からの支援】を受け、駐在保健婦として【気づきによる活動の多様化】へと住民に育てられていったと考えられた（図1）。

## 3. 地域のセルフケア支援としての公衆衛生看護活動の特徴

寄生虫予防活動は、住民によるセルフケア支援活動の体験と駐在保健婦によるセルフケア支援活動の体験が相互に影響し合い、やればできるという【成果の共有と学び】となっていた。

メイヤロフ（2005）は、ケアの本質のなかで「相手をケアすることにおいて、その成長に対して援助することにおいて、私は自己を実現するのである。言い換えれば、信頼、理解力、勇気、責任、専心、正直に潜む力を引き出して、私自身も成長するのである」と述べている。

したがって、地域のセルフケア支援としての公衆衛生看護活動の特徴は、住民と駐在保健婦がセルフケア支援活動の体験により、住民は【成長】し、セルフケア力を高められ、駐在保健婦は【気づきによる活動の多様化】により専門性を高められることが示唆された。

## 文献

- Dorothea E Orem, Nursing: Concepts of Practice 6e. (2001)/小野寺杜紀. (2005): オレム看護論 看護実践における基本概念, (初版), 医学書院, 東京.
- 金城妙子. (2001): 原点をみつめてー沖縄の公衆衛生看護事業ー, 沖縄コロニー印刷, 沖縄.
- 公衆衛生看護婦会記念誌編集委員編. (1968). 沖縄の公衆衛生看護事業ー15周年記念誌ー, 沖縄看護協会公衆衛生看護婦会, 沖縄.
- 公衆衛生看護婦会記念誌編集委員編. (1982). 公衆衛生看護事業ー30周年記念誌ー, 沖縄看護協会公衆衛生看護婦会, 116-118.
- ミルトン・メイヤロフ. (1971/1987). 田村真, 向野宣之 (訳): ケアの本質, ゆるみ出版, 東京.
- 宮城シゲ, 前田洋子, 仲里幸子. (1883). 沖縄の駐在の保健婦活動のルーツ, ナースステーション, 13(1), 54-68.
- 沖縄県. (1998). 人びとの暮らしと共に45年ー沖縄の駐在保健婦活動, 145-273.
- 沖縄県保健婦長会編. (1994). 沖縄の保健婦たち, ひるぎ社, 沖縄.
- 沖縄県環境保健部. (1985). 保健婦便覧, 11-14.
- 沖縄県環境保健部. (1981). 沖縄戦後の保健所の歩みー保健所30周年記念誌ー, 171-202, 若夏社, 沖縄.
- 大嶺千枝子. (2001). 占領期に行われた保健婦駐在の制度比較に関する史的考察, 沖縄

- 県立看護大学紀要, 2,108-116.
- 大嶺千枝子, 仲里幸子, 川崎道子, 神里千鶴子,  
与那嶺尚子, 牧内忍. (2002). 保健婦駐  
在の実態から駐在制度の確立に影響した要  
因を探る, 沖縄県立看護大学紀要, 3,33-44.
- 大湾明美. (2007). 沖縄の公衆衛生・看護に  
学ぶ—離島の保健医療看護—公衆衛生看護  
婦の「活動遺産」を引き継ぐ—, 保健の科  
学, 744-749.
- スティーブンJ.カバナ. (1993/1996). 数間恵  
子, 雄西智恵美 (訳) : オレムのセルフケ  
アモデル, 医学書院, 東京.
- 上村聖恵. (1971). 公衆衛生看護の原理と実際,  
珠真書房, 東京.
- 与那原節子. (1983). 沖縄の保健婦—結核の  
戦いの軌跡—, 保健同人社, 東京.
- 吉川千恵子. (1966). 寄生虫予防活動, 第14  
回公衆衛生看護研究発表集録, 36-41.